HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	フランスの極右政治勢力とメディアの相互作用 ： メディア公共圏の歴史的変遷からの考察［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	本間, 圭一
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(国際広報メディア)
Dissertation Number	乙第7209号
Issue Date	2024-06-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92790
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	HOMMA_Keiichi_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア）　氏名：本間　圭一

審査委員	主査	教授	城山　英巳
	副査	特任教授	鈴木　純一
	副査	教授	金山　準
	副査	名誉教授	渡辺　浩平

学位論文題名

フランスの極右政治勢力とメディアの相互作用

―メディア公共圏の歴史的変遷からの考察―

本間圭一氏の論文博士に対する学位審査は、2024 年 4 月 2 日（火）午後 2 時 45 分から同 4 時 15 分まで約 90 分間行われた。

本間氏は元読売新聞の記者で、パリ留学のほか、パリ特派員、ロンドン特派員、ワシントン特派員などを歴任し、研究者に転じた経歴を持つ。現在、東洋大学社会学部メディアコミュニケーション学科教授を務めている。

審査では冒頭、筆者から約 20 分間にわたり学位論文に関して説明した。▽問題意識、▽公共圏概念、▽先行研究との違い（新規性はどこにあるのか）、▽研究の方法、▽構成と概要、▽各章の説明、▽結論と将来への提起について、それぞれ丁寧な紹介があった。

当該論文は、フランスにおいて現代メディア環境の変化が、極右勢力に対する人々の認識を変え、極右勢力への支持拡大につながっていることを検証したものである。研究手法としては、二つの大きな柱がある。

一つは、ユルゲン・ハーバーマスの公共圏概念を援用し、「自律性」「双方向性」「対話性」の 3 基準を基に、公共圏における「人・メディア・情報・権力」の相関関係から、メディア空間の特徴について、①18 世紀後半、②19 世紀後半、③現代の主流メディア、④現代の極右支持者が利用するメディア、という 4 つのモデルを検証したことである。歴史的変遷を比較することで、現代極右メディアが支持される公共圏の特徴を浮かび上がらせた。

もう一つの柱は、フランス語を中心とした文献・資料の収集、フランスメディアのジャーナリストらへのインタビュー、フランス人への世論調査を一体化させて筆者の問題意識を立証したことである。独自のインタビュー調査の中には極右政党「国民連合」のマリーヌ・ル・ペン氏への貴重な証言も含まれているほか、巻末にジャーナリストらのインタビューの記録を掲載しており、史料的価値を意識した構成になっている点も特質である。

審査までの過程について紹介しておきたい。本間氏は日本メディア記者の経験を持つがゆえに、当初の論文では「結論」として、フランスメディアと日本メディアが置かれた現状を比較し、「日本の先例」という項を設け、「フランスの『先例』は、日本のメディア界に多くの課題を投げかけている」と総括していた。予備審査の段階で、審査委員より、論文はフランスの政治とメディアの相関関係を論じた論文として完結しており、結論で日本メディアの状況を論じるのは適当でないとの指摘があった。この指摘を受け、本間氏は「付記」として本論から切り離す形式に修正した。これでフランス政治メディア論の論文として整理されたと評価できるということで審査委員の見方も一致した。

さらに本間氏は論文で、フランスにおいて極右勢力への支持が拡大する背景には、主流メディアへの不信があり、民主主義の後退につながっているとして警鐘を鳴らすとともに、解決策として権力監視機能を果たすジャーナリズムの役割を挙げた。予備審査で審査委員から「ジャーナリズム」の定義に関する質問も出た。これに対して本間氏は「個々のメディアが、公平で正確な報道を追求し、編集が経営から独立し、権力を批判し、読者・視聴者の声をすくうジャーナリズムを実践していけば、フランスの民主主義にとって光明となるはずである」と自ら定義し、明確化したことも評価できよう。

また、審査委員からの「極右とメディアの作用は、相互作用なのか、相乗作用なのか」との指摘に対しても、「極右勢力が主流メディアの変化を一因として支持者を獲得し、それによって代替メディアが息吹を得るという相乗効果を見て取れる」と提示するなど、論文に具体性と完成度が増した。

審査委員は論文に対してそれぞれ「労作であり力作」、「多面的にフランス政治とメディアの関係を詳述しており、現代の状況を歴史的に位置づけ、インタビューも貴重な史料となっている」と評価した。こうした評価を総合すると、① 十分な先行研究がなされている、② 歴史的に 4 つの公共圏空間を比較検証し、新規性がある、③インタビュー調査や世論調査に独自性がある、④ 史料的価値が高い―などの点から、研究手法、独創性ともかなり高いレベルに達していると認定し、「合格」で一致した。